

平安時代漆芸技法資料 VII

—海賦蒔絵袈裟箱—

中 里 寿 克

国宝 海賦蒔絵袈裟箱 一合 教王護国寺蔵
 法量 横 478ミリ 縦 389ミリ 高 115ミリ

1. はじめに

この袈裟箱は空海が唐から将来した健陀穀糸袈裟を納めた箱であるが、この袈裟については大同元年(806)十月、空海が帰国直後に書いた『弘法大師将来目録』に記載がある。(註1)

すなわち巻末近くに、
 健陀穀子袈裟 一領
 (中略)

右五種亦是青竜阿闍梨之所付也

とあるのが、これにあるといわれる。

この袈裟のために海賦蒔絵の箱が造られたのは何時か、正確には明らかでないが、『東宝記』(観応三年=1352)の第二によると、

賢清僧都記云、蒔絵^{文海賦}箱一合納_二乾陀穀子

袈裟一帖^{七条也。有_レ緒。不_レ似_二尋常_一。実希代物}(後略)

とある。賢清僧都は『養和二年後七日御修法記』(1182)をあらわしており、上記の文は、ここからの引用であり、これによって平安時代末養和二年(1182)頃には、この箱はすでに造られていた事がわかる。

『東宝記』第二には又、

「去嘉暦四年六月廿五日、丑剋、群盜乱_二入宝蔵_一、盗_二出件袈裟_一、分_二取裏絹_一、七月一日、捨_二置表納於寺辺_一訖(後略)」

とあり、袈裟が盗まれ、裏絹などが剝取られて寺辺に捨てられていた事もあったらしいが、袈裟箱には被害はなかった様に思われる。

一方この袈裟と同様、空海の遺品で今は仁和寺に帰している三十帖冊子は東寺に長く蔵されていたもので、由あって文治二年(1186)に御室仁和寺に移置されたのであるが、これに箱(冊子箱)が造られた動機は三十帖冊子に付随した『三十帖策子子細』にくわしい。それによると本書は大師入寂後、東寺の経蔵にあったが、高野山座主真然が東寺長者を兼ねるに及んで寛平元年(889)、高野山に移った。同寺座主無空の代にこれを携帯して転々とし、分散の危機にあったが藤原忠平がこれを憂い、勅命によって観賢に収集させ延喜十九年十一月二日、策子料篋を新造して納め、東寺に蔵されて来たのである。

袈裟箱の蒔絵は後に記す様に冊子箱の蒔絵に技術的にかなり近いものを見せており、又納入された袈裟が冊子と同様、空海に直接関係の深い品である事を考えると、冊子箱の製作の経緯を袈裟箱の製作の経緯と重複させて考えてみたくなる。

両者は共にその内容物とよく合致した意匠が施こされているが、袈裟箱の海賦文はつまり、

海の彼方から将来された事を暗示しているものであろう。

海賦文は十一世紀頃にはかなり流行し、衣装の文様や工芸品等に多く用いられたらしい。

蒔絵では類品は少ないが仏功德蒔絵経箱があり(注2)、『大鏡』にも「かいぶに蓬萊山、手長・足長など、金してまかせたまえりし(後略)」として蒔絵の硯箱を描写している。

絵画では平家納経の提婆品の表紙に、「波に鯨」を画いており、『三十六人家集』の伊勢集、赤人集・素性集・忠見集でも料紙の下絵に波と鯨図が見られる。伝藤原公任筆の『和漢朗詠集』の料紙下絵では海賦文に近い蓬萊山図が画かれる。(注3)

文学作品の上でも例えば『源氏物語^{二十}玉^十篋』には「あさはなだのかいぶのをりもの」とあり、紫式部日記では「裳は海浦を織りて大海の摺りめにかたどれり」、「白銀の御衣篋、海浦をうちいでて、蓬萊など例のことなれど」、『栄花物語』にも「大海の摺裳うち出したるに」、「女房の同き大海の摺裳織物の唐衣など」等と、記されている。この様な文様の流行は、単に面白さを求めただけのものでなく、未知に近い大海への敬畏と好奇心を満足させるものがあったからであろう。

2. 形状及素地構造

形はほぼ方形に近い長方形で、合口造りとする。覆輪はなく、合口の立上りは身側板から削り出している(図-1)。身底にはゆるやかな畳づれをつくる(図-2, 3)。

用材は檜と思われる。甲板は一枚板を用いるが、中心線よりはずれた所で板目となる(図-4)。身底板はほぼ中間で巾約1cmの小板を矧いでいる(図-5)。この部分は甲板の板目の所と一致し、おそらく同材より製材したものである。ここに何らかの欠陥があり、これを底板に用いて、矧木したのであろう。側板も木目が粗い材である。底板及び甲板は側板に天付けとし、後者はやや巾広い塵居を造り、さらに甲盛りとするがその表面は平らである。甲盛内面



図-1 身合口部分

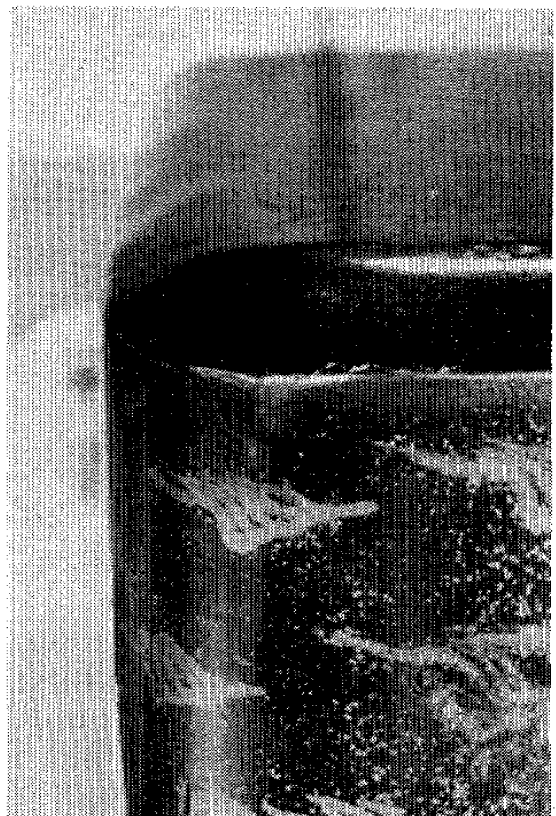


図-2 身底畳づれ

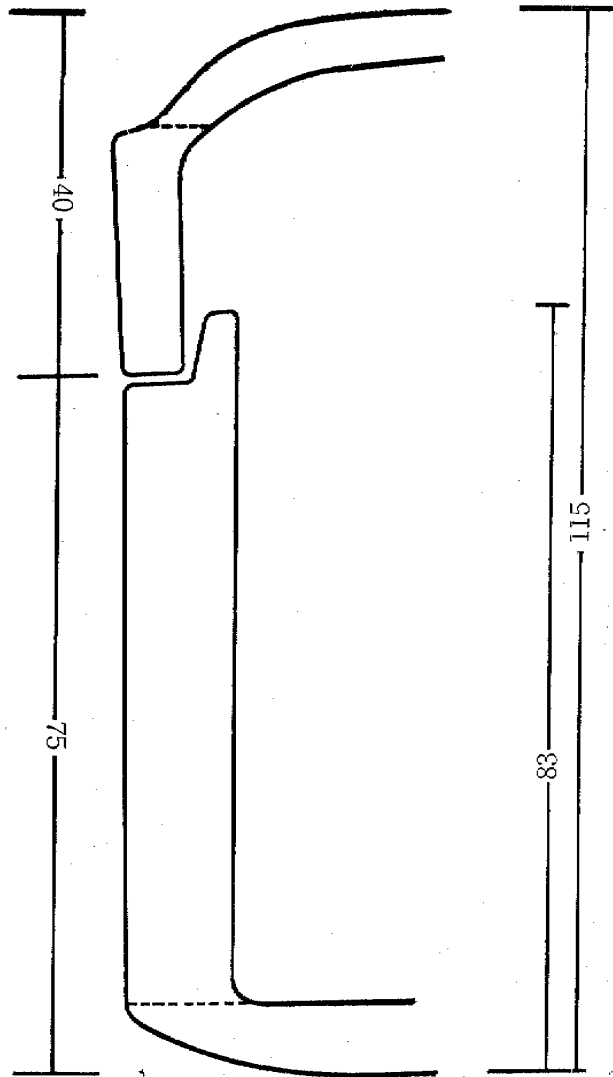


図-3 断 面 図 (実大)

(見込) は甲盛りにそってゆるい凹みをつくる。甲板の実厚はしたがって12ミリ程であろうか。なお身内底面も側板に立上る四方の隅で丸みがあるが、削り出したものかどうか確かでない。

蓋身とも側板の隅は相欠きとして組んで丸隅みとし、又胴張りはなく直線的である。

前記の様に合口の立上りは身側板を削って造り出しているが、この様な作例は他に見られない。この袈裟箱と同じ形状をもつ銀平文袈裟箱

(根津美術館) は錫縁を置いている(注4)。又俱利迦羅竜蒔絵経箱は木製だが、片木を廻している(注5)。この袈裟箱が当初から置口なしの状態であったかどうかは現状からは想像出来ない。

3. 布着せおよび下地について

身底板の小板矧目や各隅相欠き部分には木屎彫りは認められず、布着せだけが行なわれる。これらの布着せ施工はそれほど丁寧でなく、バイヤスになったり、よじれていたりする所があり、不定形の裁断が見られる。この内底板矧目部分は表裏から筋布を着せる様だが、各隅の部分は

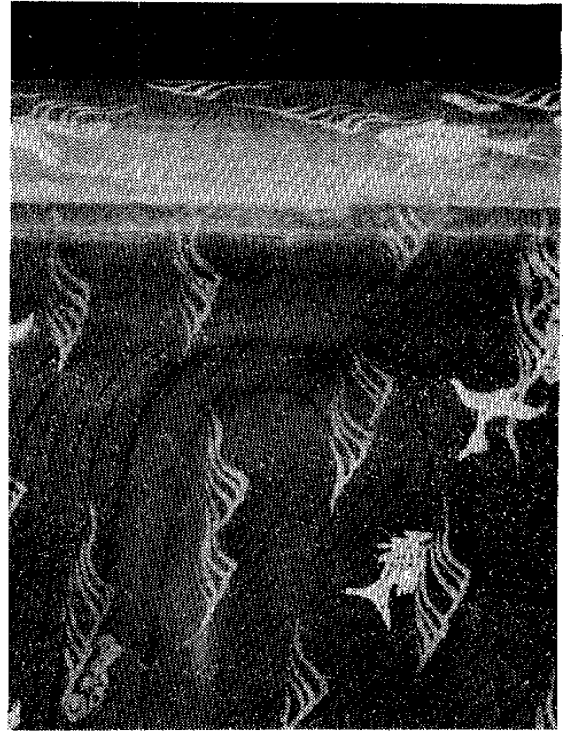


図-4 蓋甲板の布着せおよび板目の状態(X線)

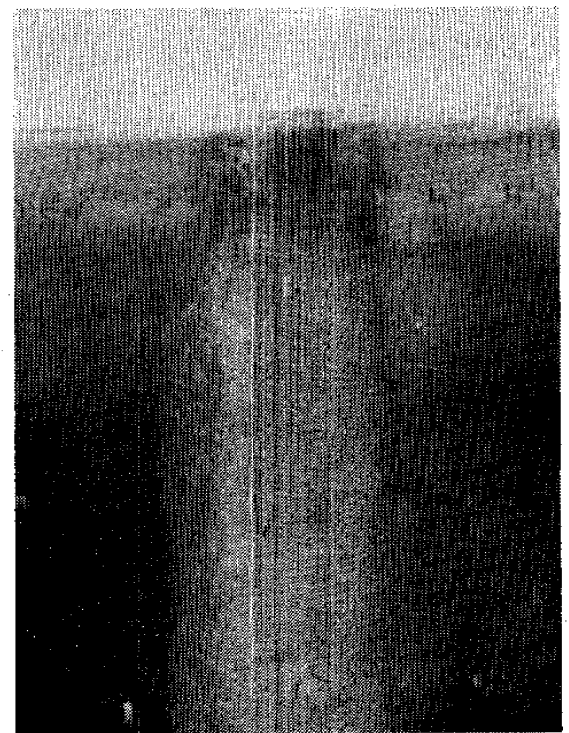


図-5 身底板の矧目部分(実大)(X線)



図-6 蓋の布着せの粗さの違い(約実大)(X線)



図-7 側面布目のヤセの状態

透漆によって行われるのが通例であるが、その点、この袈裟箱は様子を異にしており、異例の施工を行った可能性がある。

蓋、身の内面は現在かなり黒っぽい漆が塗られるが、これは明らかに後補である。この漆膜の下には栗色の透漆が認められ、それが当初の塗りであったと思われる。内部の塗漆は冊子箱の例をひくまでもなく、溜塗りの様な感じに透漆を塗っている場合が多い。

5. 蒔絵及び蒔絵粉

蒔絵は研出蒔絵であるが、蓋身とも内面には行っていない。

研出蒔絵の施工は先述の如く、透漆は用いず黒い漆のみで行った形跡がある。冊子箱の場合を見ると塗込漆に透漆を用いており、凹んだ部分等に研磨されずに斑状に残存しているのが窺える(注6)。蒔絵粉が粗い場合は、この様な現象が生じやすいが、ここではほとんど見られず、黒い漆面の内に金銀の蒔絵が浮び上がり、斑状の漆膜は見えない。

蒔絵表面は打撲痕などがあるが、断文はあまり生じておらず、良好の状態にある。ただ内面では蓋身とも木目に平行の長目の断文があり、特に蓋内では中央部分に集中して生じるのが認められる(付図-3)。

蒔絵は金と銀で行われるが、金は海賦や鳥などに、銀は波文に蒔かれ、地は金銀の平塵地となる(図-8)。

表側でのみ布着せする。ただ側面の中間部分は隅とは別個に貼っており、身では畳づれの部分と立上り部分を別けて貼り、蓋は塵居から側面にかけて貼っている。

布は蚊帳の様なやや目の粗い麻布や、細布の様なやや薄手のものが見られる(図-6)。

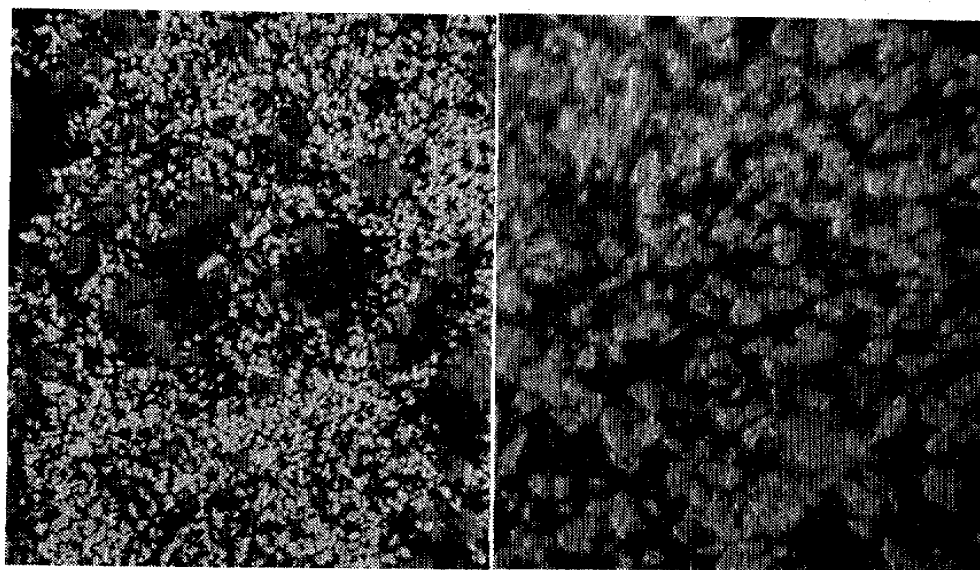
布の形は断片の様なものが多く、寸法が一般に短く、それを貼継いでいる。底板矧目の部分のみは、やや丁寧な施工である。

漆下地は薄く、布着せ以外の部分は、素地をかくす程度にごく薄く覆っているにすぎない。布着せの部分も完全に目つぶしとならず、布目がやせて現れる所も見られる(図-7)。又木目がやせて見える所もある。

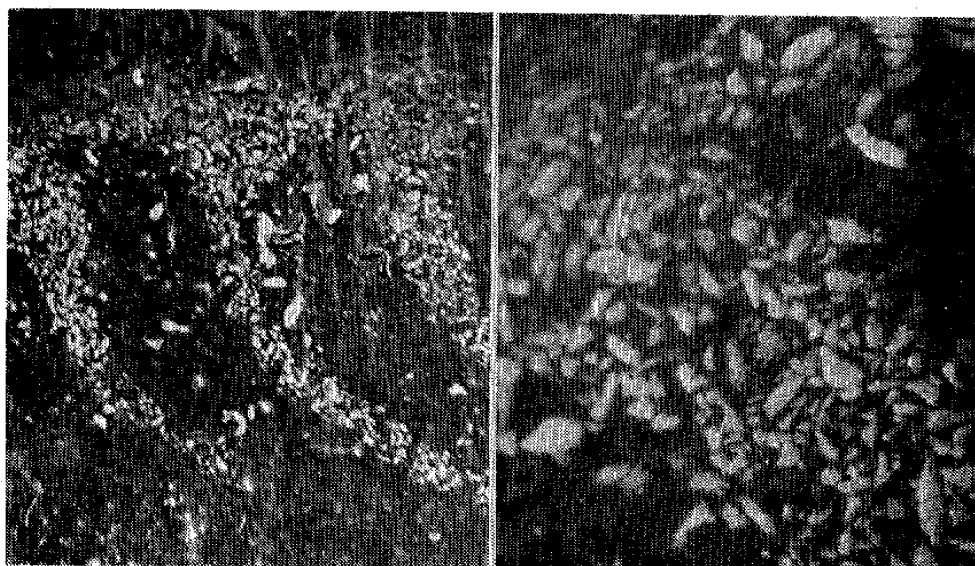
4. 塗漆について

箱表面の研出蒔絵が行われる塗面は、かなり黒っぽく、そこに透漆状の漆は認められない。

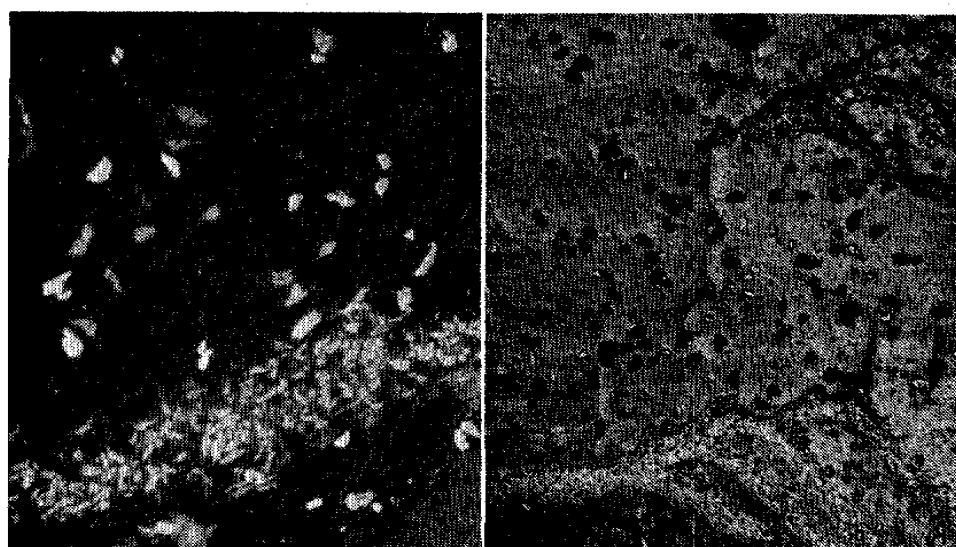
当代の遺品一般では、研出蒔絵は



(10×) 金 粉 (100×)



(10×) 銀 粉 (100×)



金平塵粉 (10×) 銀平塵粉 (黒点) (10×)

図-8 蒔絵粉頭微鏡写真

金銀の平塵地は遺例としては冊子箱のみである。あまり効果のない金銀の平塵地がどうして行われたかについては別稿で述べた事があるが^(注7)、ここでは蒔絵粉と平塵粉とで粗さが異なっており、粗い平塵粉を意識的に蒔いたとしか考えられない所がある。必ずしも蒔絵施工工程の上で自然発生的に出来上がったものでもなさそうである。

蒔絵粉は四種が認められる。

金粉は海賦の文様粉と平塵粉の二種、銀粉も文様粉と平塵粉の二種と考えられる。銀の文様粉は明らかに冊子箱におけるトゲ状粉に類似しており、興味深い。

金粉も比較的冊子箱粉に近く、平塵粉は平等院粉に近い。

金	文 様 粉	粒子はかなり揃うが、不定形が多い。多角形。
	平 塵 粉	文様粉よりやや粗い。鋭角粉が多い。
銀	文 様 粉	契形状の鋭角をもつ粉が多い。粒子は不揃い。
	平 塵 粉	文様粉より大きい。粉形は錆暈のためはっきりしない。

粉の種類が単純な事と金銀平塵地である事は、蒔絵の技法からいうと初期蒔絵の特徴を示していると思える。

すなわち、この特徴は冊子箱の蒔絵によって裏付けされるのであって、いわば官製である冊子箱が、やや固苦しい意匠である事を除けば、技法的には非常に似ているといえる。若干異なる所をあげれば、袈裟箱が波文はもちろん海賦文様まですべて線描であり、冊子箱にみられる内蒔きがみられない事である。

6. 結 語

この袈裟箱は箱の形体からいうと平安前期様式を持つ銀平文袈裟箱に相似しており、又丸隅で胴張りなく、平面的な甲盛りの様式からみると、冊子箱のそれと一致する。この様な箱はやはり古式に属し、甲盛り、胴張りの箱に先行するといえよう。

下地施工及び蒔絵技法は単純であり、蒔絵は金銀四種類の粉を用い、文様は線描のみによって現わしている。下地施工も布着せこそ行うが、漆下地は薄く、技法的には素朴である。

この袈裟箱の蒔絵を十世紀の蒔絵として考えてみると、十世紀初頭の唯一の明確な製作年代を持つ冊子箱に近い事ははっきりして来た。ただ冊子箱と袈裟箱が技法的に相似しているとはいえ、蒔絵の様式や箱の素地の製作法はまったく異なっており、袈裟箱の製作技法は、冊子箱にくらべ、より簡潔な施工を示しており、それだけ遡り得る要素を持つと云える。しかしこの違いは、官製としての冊子箱と比較して考える時には必ずしも有力な根拠とはなりにくい。

空海の帰国後、冊子箱が造られるまで約百年経過しているが、それまで冊子箱を含め将来の品々がむき出しのままでおかれたとは思われず、それぞれ然るべき箱に保管されたであろう^(注8)。しかし、冊子箱に蒔絵の箱が下賜されたぐらいであるから、袈裟の箱なども、それ以上の立派な箱に入っていたとは思われない。

先にも記した如く、冊子箱の誕生の経緯が、宝物としての策子の保護にあった事を思いおこすと、同じく空海将来の袈裟のために、冊子箱製作に刺激されて寺製として新造されたと考える事は許されない事であろうか。以上によって考察すると袈裟箱は冊子箱の製作にきわめて近い年代に製作されたとの結論を得る。

稿の終りに、この袈裟箱の調査に対し御配慮を戴いた、所蔵者である東寺の関係者の方々に紙上より感謝致したい。

なお、この稿においてはX線透視写真によって考察した所も多いが、X線透視写真の詳細な

調査結果は、『保存科学』18号において保存科学部 石川陸郎技官によって発表の予定である。

(注1) 「弘法大師将来目録」は今東寺に蔵されるが、空海直筆でなく最澄による写本と考えられている。

(注2) 拙稿「平安時代漆芸技法資料」V『保存科学』15号 昭和51年

(注3) 久曾神昇・飯島春敬『国宝三十六人家集』参照

(注4) 中里寿克他「平安時代漆芸技法資料」IV『保存科学』6号 昭和45年

(注5) 同上「 ” 」II『保存科学』4号 昭和43年

(注6) 同上「 ” 」III『 ” 」5号 昭和44年

(注7) 同上「 ” 」III『 ” 」 ” ”

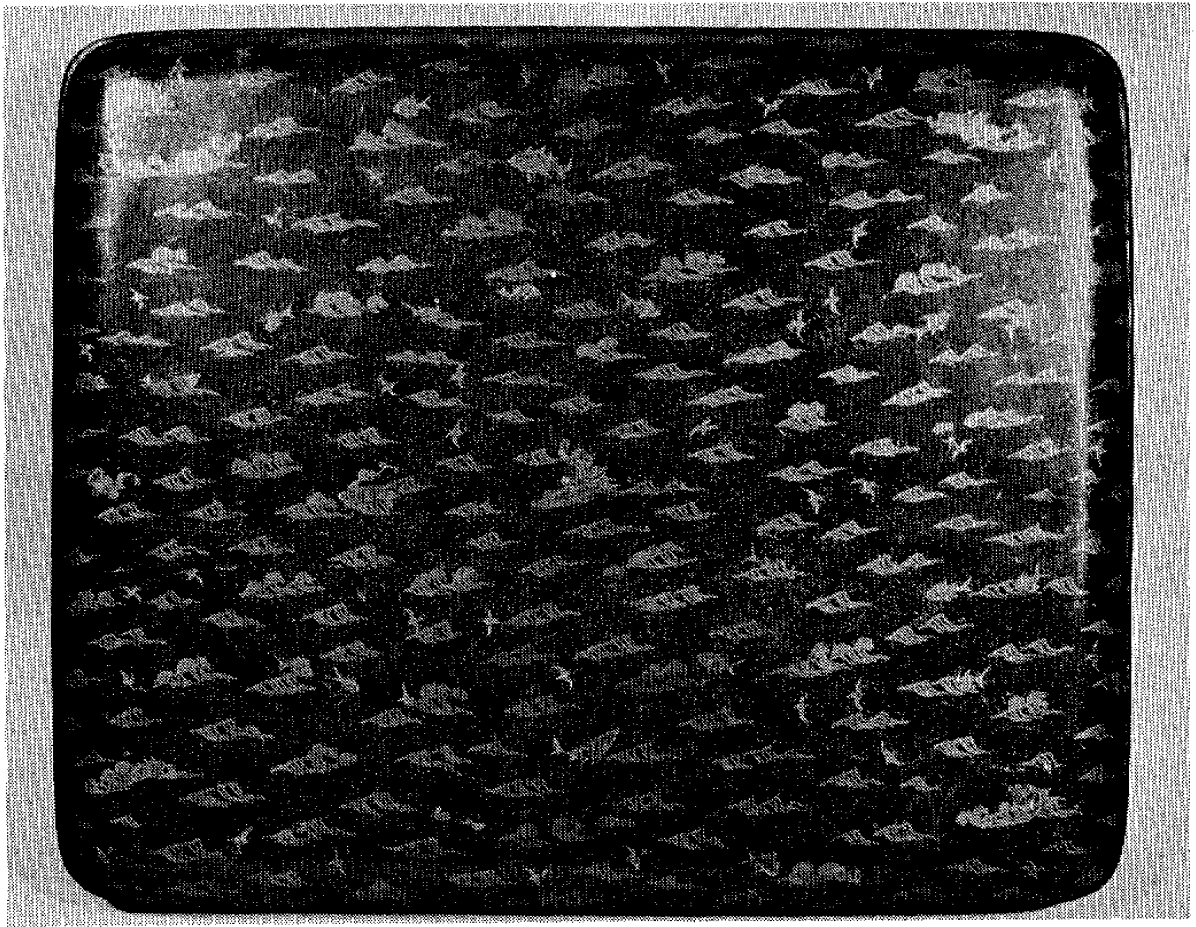
(注8) 東寺には現在、大きな漆皮箱が遺されており、これには空海将来の仏具類が納められていたという。この漆皮箱自体、袈裟箱に近い形をしており、仏具の箱に転用された事も考えられる。しかし将来の品々がこの様な箱に納められていた事は充分考えられる。

Technical Data of Lacquer Work in the Heian Period (VII)

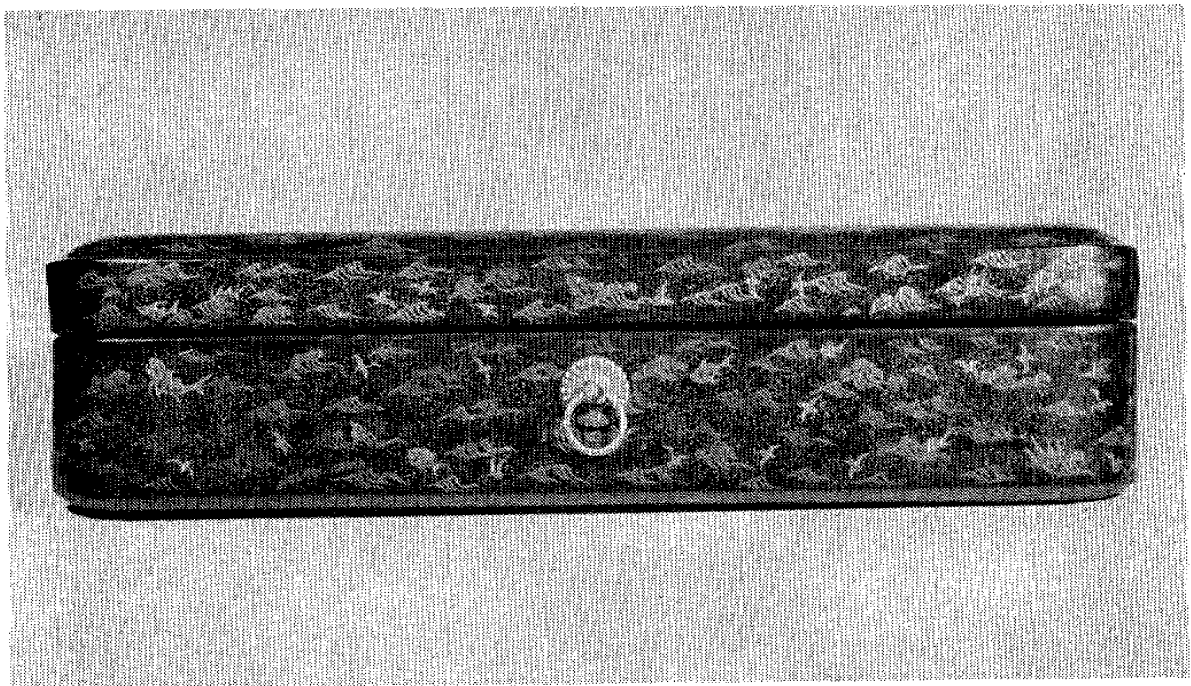
Toshikatsu NAKASATO

This article concerns the *Kesa* box owned by the Kyōōgokoku-ji Temple relating to its lacquer techniques. The box, used to hold a *kesa* (priest's cassock) brought back in 806 from Tang-dynasty China by the priest Kūkai, is decorated in *togidashi* (burnished) *maki-e* lacquer with a design of waves, sea beasts, tortoises and fishes. The metal filings used in the decoration are relatively rough. Silver filings are used for the waves and gold ones for the sea beasts and other motifs.

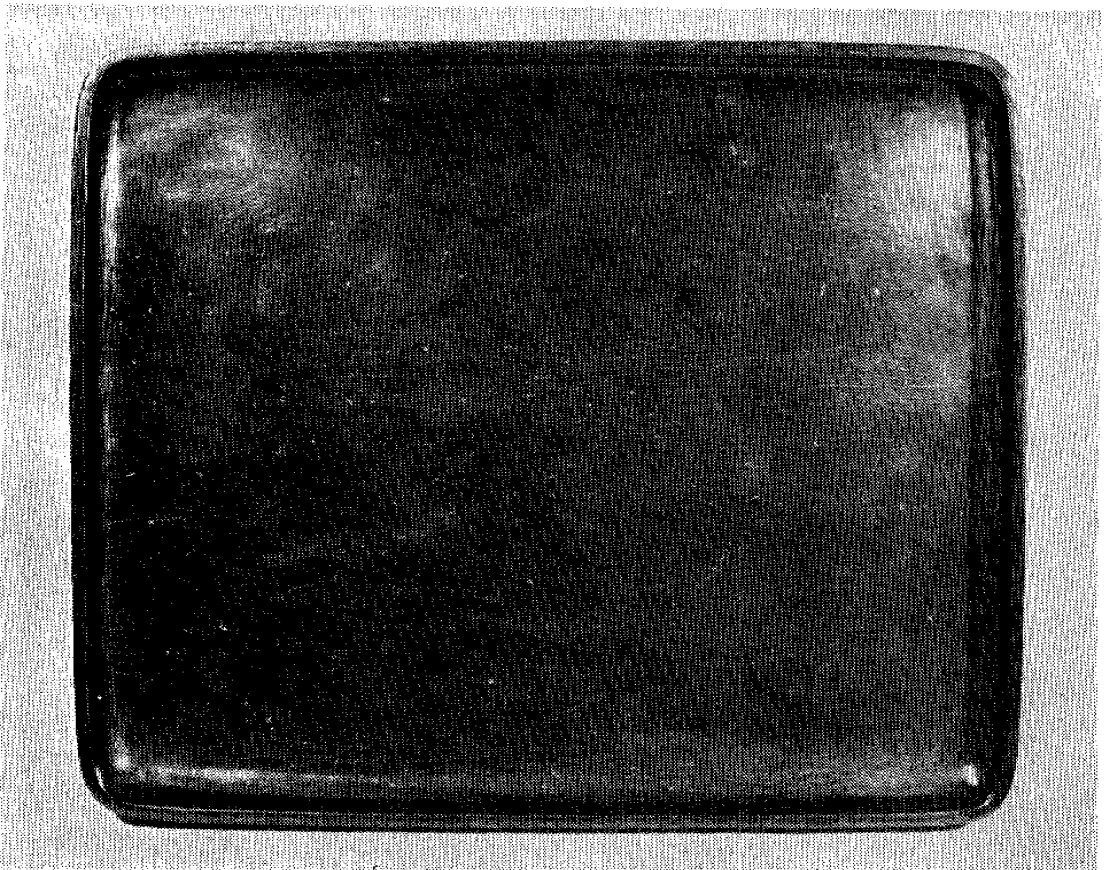
The base appears to be *hinoki* (Japanese cypress) wood. Joints of boards are covered with hemp cloth. The box is varnished with a thin ground coating of lacquer and finished off in simple methods. Synthesis of the lacquer art techniques employed for it suggests that the box was made by about 940 A. D. at the latest.



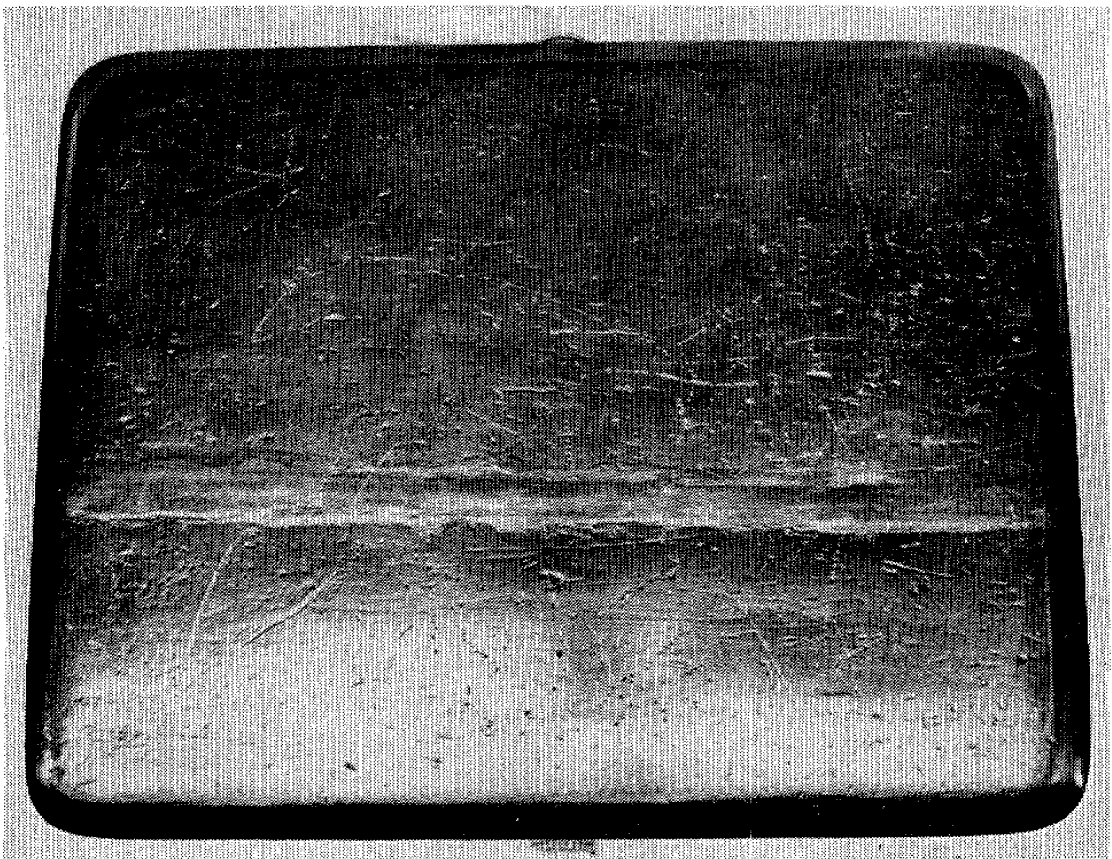
付図一 甲 面



付図二 側 面



付図—3 蓋 裏 面



付図—4 身 底 面